

想 い 出

第26回 会長 本 多 憲 児

学会というものは学術発表の場であることは当然であり、又学術発表が最も重要な任務である。従って問題は学術発表の場を如何に多くの会員に与えるか、又夫々の分野に於る優秀な学問を如何に多く発掘するかが問題である。本邦に於てはややもすると旧帝大又は之に準ずる大学に重点がおかれる傾向があった。殊に私の属する福島県立医科大学を含めて、いわゆる駅弁大学と称せられる一群の大学に於る学問は例数の少い事等より内容の優秀さが看過されたきらいがあった。

私は副会長に選ばれたときこの様な不公平はあってはならないと考え、シンポジウムのテーマを副会長時代に公示し、2年後にそなえて研究を進めていただければ新設の大学でも研究を相当に進展しうらるだろうと考え、会長の御許しを得て2年後のシンポジウムのテーマを公示させていただいた。早くシンポジウムのテーマが決定されたので研究の目標が定ってよいという御言葉を会員の何人かから頂戴し、私の考えの間違っていなかった事を確信した。実際問題として、総会の半年位前に公募されても大教室は準備可能であろうが、小大学ではとても大大学に匹敵する業績をあげることは出来ないのが現実の姿である。然し、その後、2年前にシンポジウムのテーマの公示がないのが残念である。

次に私が会長として心にとめたことは、評議員の選出であった。胸部外科という特殊の学問の評議員というものは、その道の専門家であるべきで、大学教授であるが故に評議員になりうるということは選挙の最も大きなへい害であると考えた。この点、理事会でもいろいろと議論があったが、結局、会長の考えで「評議員選挙をやめて資格制にする旨の賛否」に就て全会員に意見提出を求めた。このときは私は会員、殊に評議員である大学教授より痛烈なパンチをうけるものと覚悟をきめ、おおげさにいえば大学教授をもやめなければならないかもしれないと覚悟した。このときの私の気持ちというものは、おそらく誰も理解出来ないかもしれない。私の会長時代は選挙万能で、選挙を否定するということは暴挙にも等しかったからである。「案ずるより生むはやすし」で、会員諸兄の良識ある判断により賛成多数の御返答をいただいたときの、あの“ほっ”とした心の安らぎは今でも忘れられない。その後は現在の評議員制度となり評議員は大学教授のみならず、研究所、療養所、センター、あるいは一般病院におられる先生でも熱心に胸部外科をやっておられる方は一定の資格があれば評議員となり、学会に於て大いに活躍しうらようになった。地方大学に於て冷やめしを食っているものの発想かもしれなかったが、胸部外科学会が現在隆々として発展し、更に一歩進んで認定医、あるいは専門医制度に発展しようとしていることはよろこびにたえない。

なお学術発表に就ては、会長としては1人でも多くの人に発表していただきたいということ为主旨とし、更に fire side meeting ではないが、一部の演題はその道の専門家や研究者が集ってゆっくり発表していただくことを主眼として夜の部をももうけた。又教育セミナーを有料としパンフレットを出版し、更に講師の謝礼、旅費一切を受講料によりまかなったが、現在日本胸部外科学会主催で有料セミナーを行っており、益々盛んになって来ているのをみると感無量である。

最後に心臓移植の問題について記載する。私が会長時代には心臓移植を話題にすることは日本に於てはタブーとされていたが、心臓移植を多数行っており、而も良い成績をあげている専門家をお

呼びして世界の真の姿を一般会員に知っていただくことが学会を主催するものの1つの義務でもあ
ると考えて Prof. Shummway を招待した。

この時は問題をむし返しにするので危険でないか等種々の論議があったが、学会に於る Prof.
Shummway の多数の心臓移植の実績を本人の講演により直接耳にし会員は非常に益する所があっ
たと自負している。日本では心臓移植は不可能かも知れないが、こんなに多数の症例について現実
に心臓移植を行っている学者がおり、而も良好な成績をあげていることを知っただけでもよかった
と思っている。

会長時代の思い出は尽きないが福島市のような小さな町で而も福島医科大学のような小さな大学
でこのような大きな学会をやりとげたことに安心したと共に今後はこの新設大学でも勉強すれば
会長をやれるという自信を会員諸氏がもつことを祈って私の責を果す。

恩師故武藤完雄先生が御存命であったなら如何なる御批判をいただいたかと思うと汗顔の至りで
ある。
(福島県立医科大学教授)